

=====
一般社団法人日本アセットマネジメント協会
J A A Mメールマガジン (2023年度第19号)
2024.2.14発行
=====

今回のメールマガジンでは、被災地域でのインフラ調査、現地状況の変化に応じた対応、支援などについて、第6班の株式会社パスコから引き継いで頂いた株式会社大日本ダイヤコンサルタント 技術本部社会創造統括部 上席技師 石月謙一様から報告をいただきます。なお、株式会社大日本ダイヤコンサルタントには3名体制で1月25日～29日の間、現地での様々な対応をしていただきました。

大日本ダイヤコンサルタント株式会社 技術本部社会創造統括部 上席技師 石月謙一

第6班のパスコ様に続き、1月25日から第7班として3名体制で現地入りしました。現地調査作業としては、パスコ様を引き継ぎ、橋長15～30mの9つの橋梁を対象に取付道路および橋面上から目視調査を実施しました。

橋長30m未満の橋梁であったため、橋脚があるものはなく、1径間の桁橋や中空床板橋が対象でした。親柱や橋台に隣接した防護柵の基礎部分に新しい亀裂が見られはしましたが、橋台本体にひび割れや剥離等が生じていたものは幸いにもありませんでした。また、近傍で目視確認できた支承についても、問題は見られませんでした。但し、橋梁のパラペットと道路の継ぎ目で段差が生じている箇所が多く見られ、これらの段差を緩和するために砂利が盛られるといった応急復旧が図られていましたが、重交通の多い路線では砂利が剥ぎ取られている箇所も見られました。

なお、パラペットと道路との継ぎ目での段差は町内の至る所で見られましたが、ロードコーンにて注意喚起されている箇所は散見される程度でした。町役場担当者によると“ロードコーンの絶対数が足りず、そこまで手が回らない”とのことでした。また、幹線道路の片側交通区間では、工事用信号機による交通規制が一部区間で図られていましたが（多くの片側交通区間は、運転者相互が注意しての通行で交通制御なし）、予告看板が設置されている区間は少なく、突然、工事用信号機が現れる感じでした。

このような中、多くの建物倒壊など甚大な被害が生じた鶴川地区では、橋梁に取り付くアクセス道路の河川護岸が崩壊し、橋梁の伸縮装置部で2cm程度の高さ方向のズレが生じていました（パラペットと道路との継ぎ目にも大きな段差有り）。本橋梁は、昭和36年に架設されていますが、平成23年に修繕され、落橋防止装置も整備されていたためこの程度の影響で済んだ可能性もあり、道路構造物に対する点検・診断、それに即した対策の重要性を再認識させられました。また、鶴川の右岸と左岸を結ぶ地区内交流に重要な橋梁ですが、橋梁に添架した水道管に対する水道業者の現地調査と一緒にした際、“ここを通せれば、対岸の地区に通水できるので何とか通したい”と言った言葉が印象に残っており、橋梁の重要性を改めて痛感しました。

拠点とさせていただいたセミナーハウスは、私たちが現地入りする2日ほど前に電気は復旧しましたが、断水は続き、敷居と鴨居が歪んで部屋の襖が閉まらないため寒風が入る状況でした。そこかしこでライフラインの復旧工事が図られていますが、少しでも早い復旧復興を祈念するとともに、今後、JAAM会員として皆様とともに協力できることを考えたいと思います。

未筆ではありますが、被災者にも関わらずセミナーハウスを開放し、我々調査員に暖かい布団と雨露を凌げる場所を提供いただいたセミナーハウス関係者には深く感謝しています。この場を借りてお礼申し上げます。